“号外”パート27　平成26年11月11日　発行所:四国時報

〒768-0011
観音寺市出作町 603-3
電話 0875-25-6883
編集発行人 木下俊明

全てが捲れた・元盛力会会長の号令・川上の情報収集
ついに四国タイムズが情報提供者を大暴露

四国時報が名付け親の「さや侍」「オオカミおっさん」と世評の四国タイムズ社主・川上道大の妄言、寝言が続いている。四国時報の創刊は、元盛力会会長・盛力健児氏の山口組除籍後に結成された倭和会発足後の２年９ヵ月も後である。小悪党・川上は、四国時報の出現に己の悪質新聞の存在に危機感を抱き、無理矢理に盛力会長の倭和会・飯田会長への怨念を巧に利用して、四国時報に因縁を付けたのが平成２３年１２月号の四国タイムズで、「飛んで火にいる夏の虫」との大見出しで挑発を始めた。これまでの四国タイムズの記事を時系列に精査すれば矛盾する内容や整合性の無い記事をただ伝聞と被害妄想で盛力氏と川上の二人で書き連ね、いずれも裁判官(一審地裁、二審高裁)によって、川上の主張は認められなかった。これを異常な連続判決だと報ずる狂った奴で、世間の誰もがこの哀れな男の主張を信ずる人は一部の川上グループ以外皆無である。四国時報号外で徹底的に反論、反撃され泣き顔で紙面上のみで強がる川上。さて、四国タイムズ１１(今)月号では、四国時報が予想していた通り、川上への情報提供者の言とする記載を①～⑨書き連ねて、さもそれが真実の如く裏付けされた内容とあるが、いずれも伝聞や想像ばかり。何と小生の家族の者にまで話題を拡げてきた。弁護士が付いていながら何一つ立証できず、悪足掻きの上告をコンビの生田暉雄弁護士の下手な入れ知恵で行っているが、要は公正な司法当局が判断されることである。それにしても盛力氏や岡田(元倭和会飯田組馬場組若中)等、仮にも侠伊達が売りの任侠界に身を置いた人物とは到底思えぬ仕儀に呆れている。誰に憚ることなく申し上げておくが、小生の人生感、生き方は縁ある人達とは、どなたであれ拒むことなく接している。我が生き様について、川上如きにとやかく云われる筋合いは無い。大きなお世話である。「論より証拠」川上が裁判で何一つ立証できないのだから勝てる訳が無い。それでは①～⑨について反論しよう。[盛力氏が高松地裁観音寺支部に出廷して証言するはずだった内容]①「盛力氏の除籍前から飯田氏と結託していた」とあるが、盛力会の舎弟でも若衆でもない堅気の小生が何の目的で飯田氏と結託して盛力氏の除籍処分に繋がるのか？この除籍処分については、ご本人の著書で詳細が記されておるが、一度もこの著書の中に小生の名は登場しないし、する筈も無い。全く意味不明である。②木下氏の次男は飯田氏の若衆とあるが、全くの出鱈目。組織に属した事等一度も無く堅気です。飯田氏の若衆なら山口組執行部を努める地区責任者が取持人として列席し、盃事が行われ、その一部始終がカメラに記録されてなければならないとされる。こんな笑い話にもならない事を本気で証言台に立とうとしたなら盛力氏には滅滅だ。盛力氏が証言する事を撤回したが、この時期裁判所への川上の言い訳は、盛力氏が中国に出張中で、自分も東京方面で大仕事であるためと虚偽の陳述をしている。山口組が怖かったからと裁判所へは申し立てて無い。又、盛力氏の著書も出版されていない時期でもあり、川上得意の後付談であり時期的に整合しない。

[飯田氏の元運転手だった岡田氏から取材した内容]③④について、こんな半端な小僧っ子話を鵜呑みにする自体、笑い話である。観音寺市内の焼肉店で店員を脅した事件で逮捕され組を脱退した人物。この子は現在服役中だが、自らの裁判で川上に助けを求めて、コンビの生田弁護士が付いた一審での敗訴から控訴審の際、生田弁護士はこの子の親や、関係者に「弁護士一人よりは二人の方が有利だ」と親の心情を利用して、安藤弁護士を雇い３０万円を出させたものの、結果は実刑となり現在服役中である。小生宅への来訪者のどなたとでも写真を撮影しているが、それがどうしたというのか？何が悪いのか？[三豊市仁尾町のＴ氏から取材した内容]⑤についてＴ氏(田●氏)なる者の話も噂話の域。⑥についても商品説明会は正当な行為であり何ら問題にならない。[観音寺の元曽根組幹部井上氏から取材した内容]⑦同じく想像や噂話の域。元タクシー運転手だった井上なる人物は大日本平和会至誠会当時の曽根組傘下「仙波組」の組員だった人物で、「元曽根組幹部」とは笑わせる。この人物は、観音寺市村黒町の十鳥晴美の仲間で、彼の下で火葬場の仕事をしていた男で十鳥同様だ。[観音寺大野原の女性から取材した内容]⑧この女性とは上田まつ子氏だが、彼女は自称盛力氏の親戚だと誇らしげに吹聴しており、小生同様にかつて盛力氏が帰郷する際の立寄り先の一つで、秋祭りには同家や豊浜町の某所で彼女の号令で盛力氏を招き、記念撮影や名刺配布付きで多くの知人を呼び寄せ会食していた。主婦数人もお手伝いとして参加していた。彼女宅には盛力氏の肖像画、色紙、ラベル入り酒、盛力会のカレンダーを掲げている。毎年５月２９日に大阪で開催されていた盛力氏の誕生パーティーにも出席している。川上の言を借りれば、彼女達も立派な企業舎弟ということになるが。そもそも研修会云々と報道された時から、盛力氏絡みで彼女しかいないと予想していたが、いずれにしても彼女にとやかく云われる筋合いは無い。[会場施設である観音寺グランドホテル関係者から取材した内容]⑨についても会場の申込みのどこが問題なのか？川上が報道した倭和会の香川進出云々と何の関係があるのか？といったところである。一々馬鹿丁寧に回答するのもどうかと思いながら反論させて頂いたが、盛力氏や川上が何と喚こうと一審、二審いずれも全面敗訴。この判決が最高裁で覆る事は、太陽が西から昇る事が無いように、川上と生田弁護士や川上側に付いた全ての者達は失意のどん底に落ちることでしょう。何ともお気の毒だが、これも貴方達の自業自得だ。仮初にも「親分」「会長」「親父」等と云われた御仁が不運にもこの事態になった事を、女々しく泣き言に取れる言動に、かつて親しくさせて頂いた小生は残念でならない。著書「鎮魂　さらば愛しの山口組」を組関係者を含む多くの方が読まれて衝撃を受けたとされるが、小生はその年その年起こった事についてはその都度、ご本人から詳細を聞いておりました。ですから逆に、山口組の為に先陣を斬って戦地に乗り込み、舌まで噛んで厳しい取調べに耐えた盛力氏の口からこれほどまでに赤裸々に組織内部の実情を世間に暴露した事の方が、小生にとっては衝撃だった。人を見る目があったなら、川上如きと決して結託しないのが普通であろう。「任侠界の英雄として後世に語り継がれる人物とは到底云い難い」との任侠界での酷評に目を覆いたくなる。元盛力会の古参幹部だった人物でさえ「大阪でもあんまりええ噂聞きまへんなぁ」とのこと。人の思い込み、邪推とはここまで人を変えてしまうものかと、今回の件で改めて痛感したものである。